

片戀

戀こひしくて
裏うらへ出でて見みりや
青あおい空そら

はかない
わたしの
片戀かたこひよ

はかない
わたしに
何故なぜしたの

荒海あらいみのやうな
ところに
何故なぜしたの

煙草の花

お蔦嫁さま

煙草の花は

元の男の 畑に咲いた

お蔦嫁さま

もう 諦めた

何にも縁だと もう諦めた

切れた障子の
穴から見たら
後向きして繚繰りしてる

石地蔵

學校先生よ

石地藏さまも

赤い涎掛

かけてゐる

烏ア欲しくて

涎掛見てる

學校先生よ

何じよにしべ

櫛

裏の川端の
さらさら蓬

思ひ返して

みる気はないか

今朝も 裏戸に

櫛が落ちてゐた

通つて来たのか
可哀想なものだ

葛飾の夏

卯の花が散る

時鳥が啼く

沼の中に

菖蒲の花も咲いてゐる

沼の中の

菖蒲の花よ

葛飾に

今二月もゐたかつた

家も屋敷もない 己は

去年の夏は東京に

今年の今は葛飾に

わかれねばならぬ時が来た

この住み馴れた
葛飾の

菖蒲あやぶの花はなよ
また逢あはう

港の時雨

蛇の目傘に

時雨が降るに

月日かぞへて

港を見てる

待つはつらかる

待たるる身より

伏木港の

船頭さん達よ

蘆枯れ唄

蘆が枯れたら

どこで逢ひませう

前の河原は

石まで枯れるし

蘆が枯れたら

どこで逢ひませう

裏の畑は

土まで枯れるし

蘆が枯れたら

どこで逢ひませう

蘆の枯れ葉の

蔭で逢ひませう

おけらの唄

おけらの唄の
さびしさに
窓にもたれて
すすり泣く

まぼろし草も
コスモスも

花は昔の
ままで咲く

おけらの唄の
さびしさに
壘の上に
伏して泣く

鶉

今日も鶉が
丘に来て啼いた
おれも泣きたい
鶉の鳥よ

空は乳色に
また日か暮れる

死んで別れた
人ではないし
忘れようとして
忘らりよか

錆

窓の格子によりかゝり

「いつまた来るの」と

泣く女

錆た庖丁の かなしくも

「はかない身だよ」と

さうか知ら

ただ明易い 夏の夜の
街はあかるい
青すだれ

磨いでも磨いでも 庖丁の
錆は磨いでも
さうか知ら

夕の月

お仲姉さま

畑の中で

しやなりくくと

麦踏みしてる

雁は歸るし

夕の月は

榎林の上から
出てる

√ つまらないよと

涙で言ふた

お仲姉さま

丸顔だつけ

スイッチョ

スイッチョくと

大阪の

街のはづれで鳴くスイッチョ。

姉は筑紫の

長崎へ

妹も筑紫の

長崎へ

スイッチョくと

蔦の葉の

上にとまつて鳴くスイッチョ。

お
け
ら

左官が 左官が
藏建てた

おけらが三匹
出て鳴いた

大工が 大工が

家建てた

お月さん ぼかんと
眺めてる

女工唄

雨あめの降ふる日は

雨あめだれ

小こだれ

何なにも戀こひしくないが

公休こうきゅう日ひが戀こひし

空そらの辨べん當とう箱ばこ

雨あめだれ

小こだれ

腹はらの減へるたび

故郷こきょうの親おや思おもふ

いいやな監かん督とくさんだ

雨あめだれ

小こたれ

何なにも戀こひしくないが

公休こうきゅう日ひが戀こひし

かかれくと
モ一タが廻る
なにかかりませうか
雨だれ
小だれ

釜山にて

牧の島から

對島が見ゆる

最早對島も

春だるに

海にや海霧

朝から立ちやる

對島見るなの

霧ちややら

颯

颯ア騒ぐから
背戸へ出て見たりや

烏ア河原で
水浴びしてた

山の頂上にや

薄雲かかる

今夜山から
雨ア降るか

娘と劉さん

I

娘

劉さん

赤ん坊が生れたならばどうしませう
何處へたのんで育てませう

劉

ワタシ ワカラナイ アナタ スル ヨロシ

娘

横濱の叔母さん所へ遣りませう
新しい一身の一も着せて遣りませう

II

娘

叔母さんに断られたらどうしませう

劉

ワタシ クニ トホイ ワカリマセン

娘

悲しいけれど捨てませう

顔の見えない闇の晩

ミルクの管を咄ませて——公園のベンチの上に捨てませう

III

娘

お月夜の晩であつたらどうしませう

お月夜が続いて居たらどうしませう

育てませうか捨てませうか

劉

ワタシ ニホン タツ アナタ タノム

娘

薄情な 薄情な 劉さん
 思ひ切つて——悲しいけれど捨てませう
 ベンチの上に青青と月がさしたら泣くでせう
 わたしの顔をきつと眺めて泣くでせう
 劉さん
 劉さん
 劉さん
 その時のわたしの心はどんなでせう

大正十三年七月十一日印刷
 大正十三年七月十日發行

(定價壹圓四拾錢)

◀ 雨情民話百篇 ▶

著 者 野 口 雨 情

發 行 者 東 京 市 區 區 矢 來 町 三 番 地 佐 藤 義 亮

發 行 所 東 京 市 牛 込 區 矢 來 町 三 番 地 新 潮 社

電 話 牛 込 八 八 八 八 〇 〇 〇 〇 九 八 七 六 番 番 番 番

番二四七一(京東)藝授

印 刷 所 東 京 市 小 石 川 區 西 江 戶 川 町 電 話 小 石 川 五 九 二 番 富 士 印 刷 株 式 會 社

印 刷 者 佐 々 木 俊 一

西條十八氏著作

■詩集赤き獵衣 (九版)

小型絹表紙
價壹圓四拾錢
送料十錢

小曲幾十篇を収めたる可憐の新集である。その想やあくまで哀婉、その調やあくまで優麗。たとへば、夕風にみだるゝ羅罌粟の如く、夕月にほのめく月草に似たり。別れたる戀人をなげき、失はれたる夢に泣く。字々珠玉、句々精金、これを西歐の名詩と比ぶるも、毫も遜色を見ないであらう。

■西條童謠全集 (新刊)

特大判四百頁
價貳圓貳拾錢
送料拾貳錢

現代の文學に明かに一分野を劃せる童謠の世界に、王者として君臨するものは、云ふまでもなく西條氏である。本書は、氏の童謠すべて百四十餘篇を集めた『童謠全集』であつて、ひとり詩壇の大收穫たるのみならず、學校と家庭と、一般社會とへの、最も誇る可き贈物であることを信ずる。

■西條八十譯詩集

□ □ □

■感想詩作の傍より

□ □ □

■新詩集わが家

□ □ □

現代詩人叢書

恩地孝氏裝幀
價一冊六拾錢
送料一冊四錢

目下出版せらるゝ詩集の、たゞ裝幀のみを飾つて定價の不廉甚しき弊を破るべく、購ひ易く讀み易き此の叢書を創刊したのである。瀟洒たる體裁の美本で、一卷百六十頁の間に各著者の代表作品を網羅し、價は僅に六拾錢である。創刊以來、文字通り飛ぶが如き賣行きを示しつつあるは、何人も知るところであらう。

(1) 沈黙の血汐	野口米次郎	(8) 澄める青空	生田春月
(2) 蠟人形	西條八十	(9) 風車	百田宗治
(3) 預言	川路柳虹	(10) 古風な月	日夏耿之介
(4) 田舎の花	室生犀星	(11) 愛慕	白鳥省吾
(5) 季節の馬車	佐藤惣之助	(12) 沙上の夢	野口雨情
(6) 青き樹かげ	三木露風	(13) 遠き薔薇	堀口大學
(7) 炎	千家元麿	(14) 蝶を夢む	萩原朔太郎

長篇 叙詩 高原の處女 福田正夫氏作

紙數二百四十頁、價八拾錢、送料六錢

小説と詩との特色を兼ね備へた、文壇最初の試みたる「長篇叙詩」の第一作である。一人の美しい處女の、美しい戀を主題として、永遠の人生を歌へるもの。すべて七篇數十章、朗かな韻文を以て終始してゐる。

新刊

漂泊と勞働の詩集 散華樂 壹圓六拾錢 送料拾錢 三石勝五郎氏著

小曲集 夢心地 價八拾錢 送料六錢 生田春月氏著

春月小曲集

生田春月氏著

小形天金 定價七拾五錢 極美本 郵送料六錢

多恨多感の詩人春月氏の、小曲百八十餘篇を収む。戀を歌ひ、少女を歌ひ、若き日の夢を歌ひ、破れし胸のかなしみを歌ふ。哀切にして可憐、悲痛にして哀婉。日本傳來の原朴なる歌謡の精神と、近代人の鋭敏なる神經とは作者が天賦の詩人的素質の中に融合して此の世にもいみじき抒情詩をなす。ひびきは玉の鳴るに似て、すがたは花の散るに似たり。詩壇近來の一大收穫として注目す可く、わけても、あこがれ心地すゝなる若き人々の、愛誦おく能はざるものなる可し。

詩集 感傷の春

生田春月氏著

二百七十頁 價八拾錢 中版特製 郵送料六錢

詩集 靈魂の秋

生田春月氏著

二百七十頁 價八拾錢 中版特製 郵送料六錢

「感傷の春」は傷み易き青春のおもひを盡くして、熱き戀、果敢なきあこがれを歌ひ、「靈魂の秋」は心の秋を歌ひて、青ざめし魂のあへぎを彈ず。共に長曲短曲二百有餘篇を集めしもの。兩々相待つて、青年詩人生田春月の全詩集をなすもの也。

生田春月氏著

詩の作り方

— 價七拾錢、送料六錢

◇詩とはどんなものか◇詩人とはどんな人か◇詩はどんな時に出来るか◇推敲はどんな風にするか◇題のつけ方——かういふ風な二十餘の題目に分つて、新らしき詩の作り方を懇切に説く。初學入門の士の必讀書である。

金子薫園氏著

歌の作り方

— 價七拾錢、送料六錢

本書を讀んだ人は、誰れでも、始めて歌といふものが分り、歌の作り方がのみ込めたこと云ふ。まことに此の書の如く平易に懇切に、作歌の道しるべとなり、其上達の方法を實際的に説いたものはあるまい。初學の絶好師友であらう。

金子薫園氏著

小品一千題

— 價六拾錢、送料六錢

小品文の一大集成である。若き人々の作つた小品文を集むること一千篇。これを百十餘種に分類してある。小品文を作らうとする際、その求むるところの題材は、いかなるものでも此の書の中に容易に見出す事が出来る。

相馬御風氏著

新描寫辭典

— 價九拾錢、送料六錢

東西諸名家の作品から描寫の最、すぐれた部分を選び、これを辭書の格式の下に整然と蒐集分類し、これを辭書の格式の下に整然と蒐集分類し、現代の最新文章辭典である。たもので、現代の最新文章辭典である。簡潔なる註釋批評を加へた事も一特色である。

516
241

終